

和歌山市手平地区における沖縄県出身者コミュニティ

松村 嘉久

I はじめに

明治末期から昭和20年代にかけて、和歌山県の主力産業は紡績業・織物業・捺染業を中心とする繊維および繊維関連業であった。周知の如く、紡績業は代表的な労働力集約型産業であり、大量の労働者—女工—を必要とした。長野県諏訪湖畔における紡績業の主要な労働力供給地が、飛騨地方や東北地方であったのに対し、和歌山県の場合は東北地方からの女工に加えて、西南日本の沖縄県・鹿児島県出身者が多かった。女工として和歌山県にきた沖縄県出身者の中には、紡績業が後退した戦後も、そのまま和歌山県に住み続ける者が少なくない。和歌山市内の手平地区周辺は、こうした経緯で和歌山県に定住した沖縄県出身者の集住地区であるが、これまでほとんど言及されてこなかった。管見の限りで関連する研究は『沖縄女工史』で、これには明治末期から大正・昭和にかけての沖縄県出身の紡績女工をめぐる状況と、彼女達の談話が載っており、和歌山県の事例も若干言及されている¹⁾。

筆者は、1997年8月2日～6日にかけて、手平地区に定住した沖縄県出身一世のかつての女工3名、及び沖縄県人会関係者に聞き取り調査を行った。本稿の目的は、この聞き取り調査の成果を紹介しつつ、手平地区周辺における紡績産業と沖縄県出身者の定住との関係を考察することにある。

II 紡績業の盛衰と手平地区

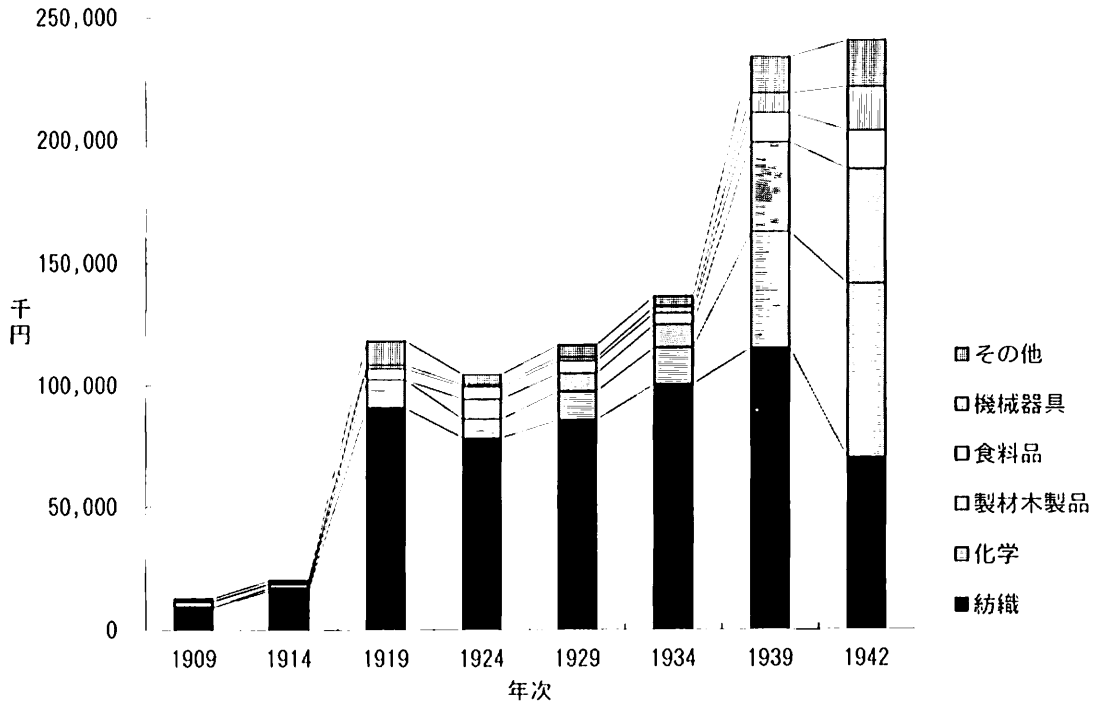
(1) 戦前期和歌山県における紡績業

和歌山県における紡績業は、和歌山紡織株式会社（以下、和紡と略す）が明治20（1887）年に市

内傳法橋南ノ丁で創業したことに始まる²⁾。紡績業を含めた紡織業が和歌山県全体の工業総生産額に占めるシェアは、明治42（1909）年から昭和9（1934）年まで、おおよそ70%前後を保ってきた（図1参照）。同じ期間の紡織業従業員数も、70%以上を占めている（図2参照）。日中戦争が激化するなか、紡織関連の工場が軍需工場に転用される昭和10年代後半まで、紡織業は和歌山県の主力産業であり、そのなかで紡績業と捺染業は大きな地位を占めていた。

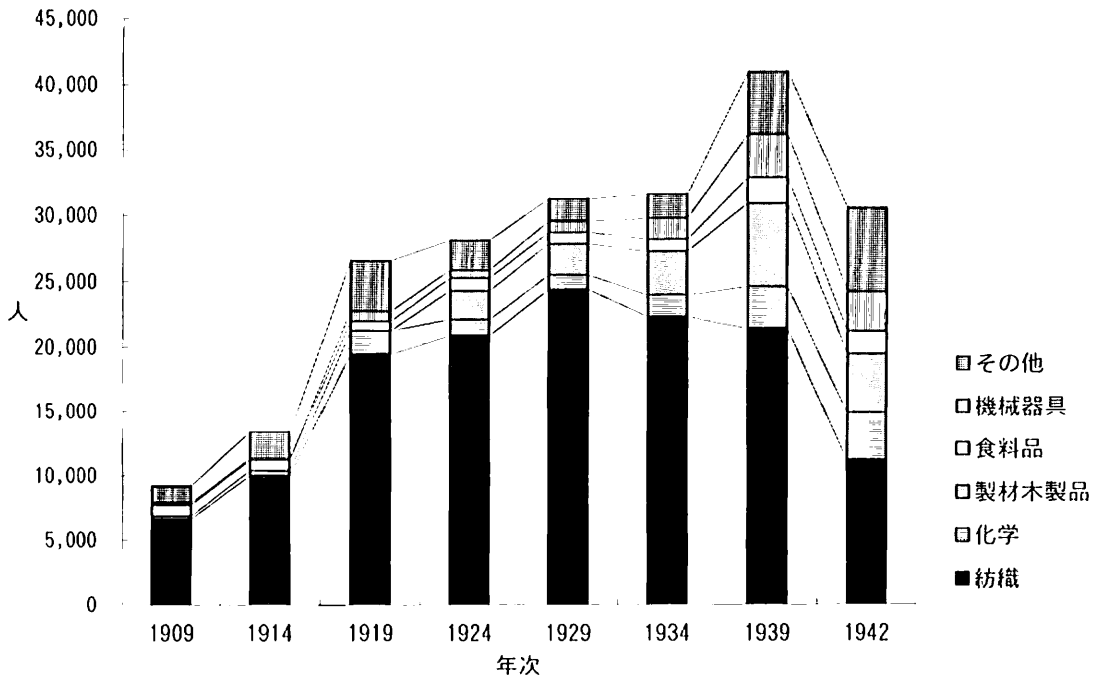
表1は、聞き取りの年代的背景となる昭和7（1932）年と昭和12（1937）年の和歌山市・海草郡における紡織染色工場の従業員数を示したものである。昭和7（1932）年において最も手広く紡績業を営んでいた和紡は、現在の和歌山市内に本社工場（傳法橋南ノ丁）・中之島工場・手平工場・紀ノ川工場の4工場を持っていた（図3参照）。この表からまず読みとれるのは、従業員の男女比率において、紡織工場は女性比率が高いのに対し、染色工場の方は男性比率が高いことである。この染色工場で働く男工のなかには、沖縄県出身者が少なくなかったと言う。両時期の従業員数を比較してみると、染色工場ではほぼ横ばいか微増程度であるのに対し、紡績工場においてその増加が著しい工場が多い。ただし、和紡は昭和5（1930）年の金輸出解禁による日米為替変動で原綿価格が上昇したため経営難に陥り、昭和10（1935）年に中之島工場を鏡紡に手放し、昭和12（1937）年に手平工場を閉鎖し、本社工場と紀ノ川工場に資本・労働力を集中させたと考えられる。本稿が目指す昭和紡績は、わずか5年間で従業員数は5倍ほ

図1 和歌山県工業総生産額に占める紡織業の地位の推移



資料：商工省『工場統計表』の各年次版より作成。

図2 和歌山県工業総従業員数に占める紡織業の地位の推移



資料：商工省『工場統計表』の各年次版より作成。

表1 昭和10年前後における和歌山市・海草郡の紡織染色工場（従業員総数100名以上）

工場名	住所	昭和7年の従業員数			昭和12年の従業員数		
		男工	女工	総数	男工	女工	総数
内海紡績(株)内海工場	海草郡 内海町大字名高8	218	819	1,037	156	898	1,054
松太綿布(株)宇須工場	和歌山市 宇須319	103	605	708	88	574	662
和歌山紡織(株)紀ノ川工場	和歌山市 五筋目10	102	480	582	122	1,106	1,228
和歌山紡織(株)本社工場	和歌山市 傳法橋南ノ丁1	94	421	515	75	723	798
和歌山紡績(株)中之島工場 ¹⁾	海草郡 中之島村向芝17	88	317	405	—	—	—
和歌山染工(株)北島分工場	海草郡 野崎村大字北島459	96	304	400	58	641	699
鐘淵紡績(株)和歌山支店	海草郡 中之島村向芝195	55	296	351	54	1,021	1,075
紀陽染工(株)	和歌山市 新内185	266	62	328	408	143	551
和歌山紡績(株)手平工場 ²⁾	海草郡 宮前村大字手平278	64	259	323	—	—	—
納定染工(株) ³⁾	和歌山市 納定33	268	55	323	312	121	433
和歌山綿布(株)	和歌山市 畑屋敷中ノ丁5	258	53	311	180	50	230
昭和紡績(株)	海草郡 岡町村川向91	70	180	250	152	1,083	1,235
和歌山捺染(株)	和歌山市 屋形町4-9	161	47	208	165	24	189
南海染工(株)	海草郡 宮前村大字手平127	144	34	178	150	43	193
和歌山染工(株)	和歌山市 石橋町1	138	31	169	246	62	308
日本染業(株)	和歌山市 納定90	136	32	168	143	39	182
池田染工場 ⁴⁾	和歌山市 納定51	142	25	167	139	45	184
和歌山製織工場	和歌山市 元寺町西ノ丁6	17	106	123	18	94	112
玉置捺染工業所	海草郡 築地1	81	20	101	78	34	112

資料：協調会編『全国工場鑑山名簿』の昭和7年版と昭和12年版より筆者が作成。

注：*1は昭和10年に閉鎖され、*2は昭和12年に閉鎖されている。

*3の昭和12年の会社名は和歌山染工株納定工場で、同じく*4は新興捺染合資会社であった。

ど増加し、昭和12年には最大の従業員規模を誇る紡績工場に成長している。

次に、手平地区周辺の工場立地に注目してみよう。昭和初期の手平地区周辺には、図3に示したように、和紡手平工場・南海染工・昭和紡績工場、和歌川を挟んで西岸には松田綿布工場等、多数の紡織関連工場が立地していた。なかでも従業員規模の大きかった昭和紡績工場は、手平地区周辺に沖縄県出身者が集住する過程で、後述するように重要な役割を果たしてきた。図3にある昭和紡績工場の敷地には、元来明治44（1911）年創業の紀陽織布株式会社工場が存在した。昭和6（1931）年に紀陽織布は織物部門を廃業して、紡績部門だけの昭和紡績に会社名を変更し、以後は昭和紡績和歌山工場となる³⁾。また、図3では和歌川沿いの白樫橋から手平地区に抜ける道路があり、その南北両方に工場が確認できるが、島津俊之が大正末期のものと同定した「和歌山市街地図」⁴⁾では、この道路の南部に工場は確認できない。従って昭和ひとけたの時期に工場は拡張され、表1のよう

に当工場は、昭和12（1937）年の数字では紡織業では和歌山県ではもっとも大きな工場に成長している。その成長の背景に沖縄出身者の雇用が見られたと考えられる。昭和10年代の昭和紡績工場の様子は後述するが、この時期にこの道路は存在せず、南北の敷地は合併され旧道路の東端が正門になっていた。

なお、昭和紡績工場は昭和17（1942）年に軍需転換により、三菱重工業和歌山工場となり、戦後は三菱電機(株)和歌山製作所に引き継がれたが、紡績工場当時の煉瓦づくりのたたずまいを残す建物が現存している。軍需転換の際、同紡績工場の女工達は6円ほどの賞与を貰って、全て解雇された。解雇された女工達の中には、他の紡績工場に転職する者もいたが、そのまま三菱重工に再雇用される者もいた。参考までに旧紡績工場跡の現在の土地利用を紹介しておく。和紡本社工場跡には和歌山市民会館が、和紡中之島工場跡には県立体育館が、和紡紀ノ川工場跡には競輪場が、和紡手平工場跡にはイズミヤ和歌山店が立地している。

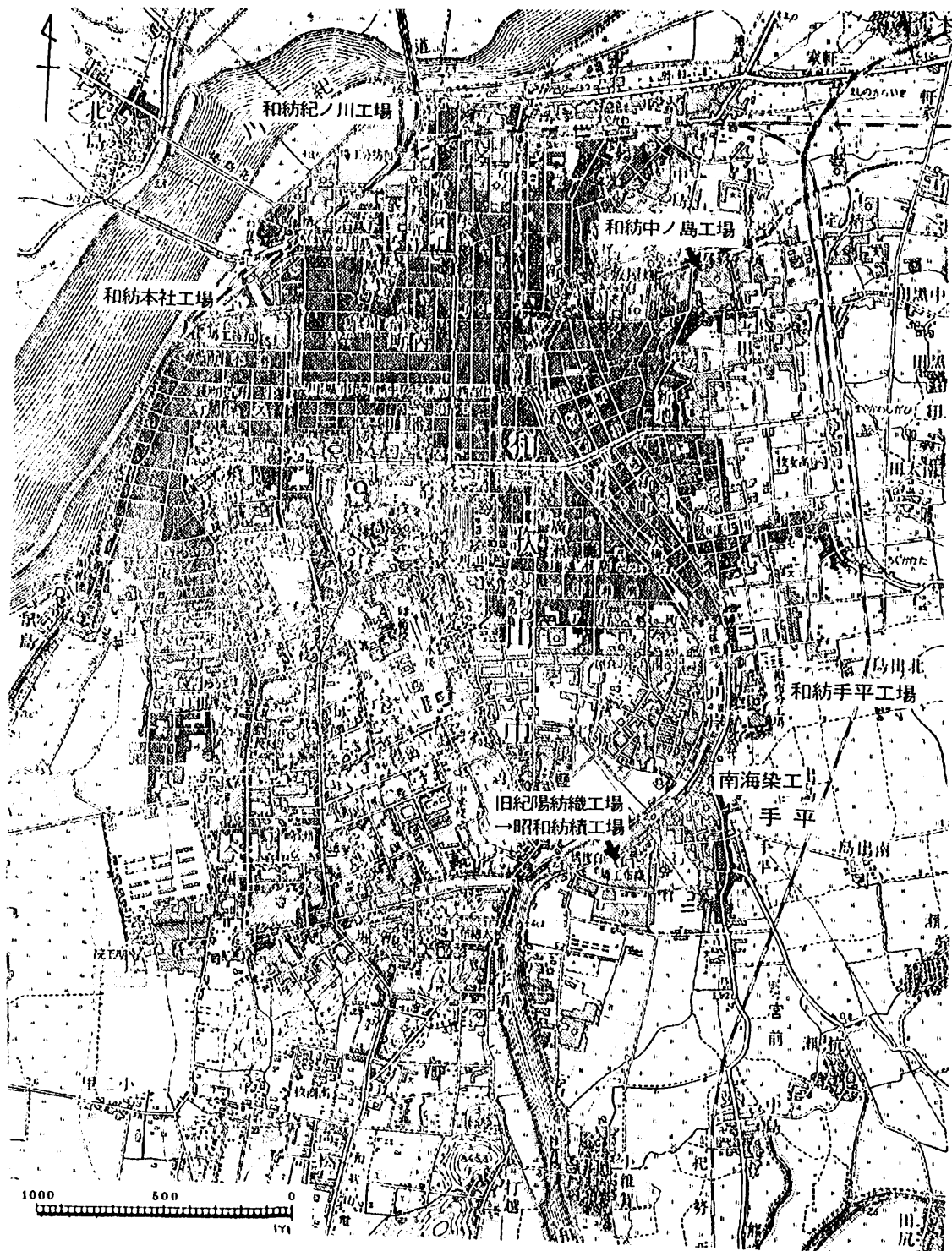


図3 昭和9（1934）年当時の和歌山市（昭和9年修正測図）

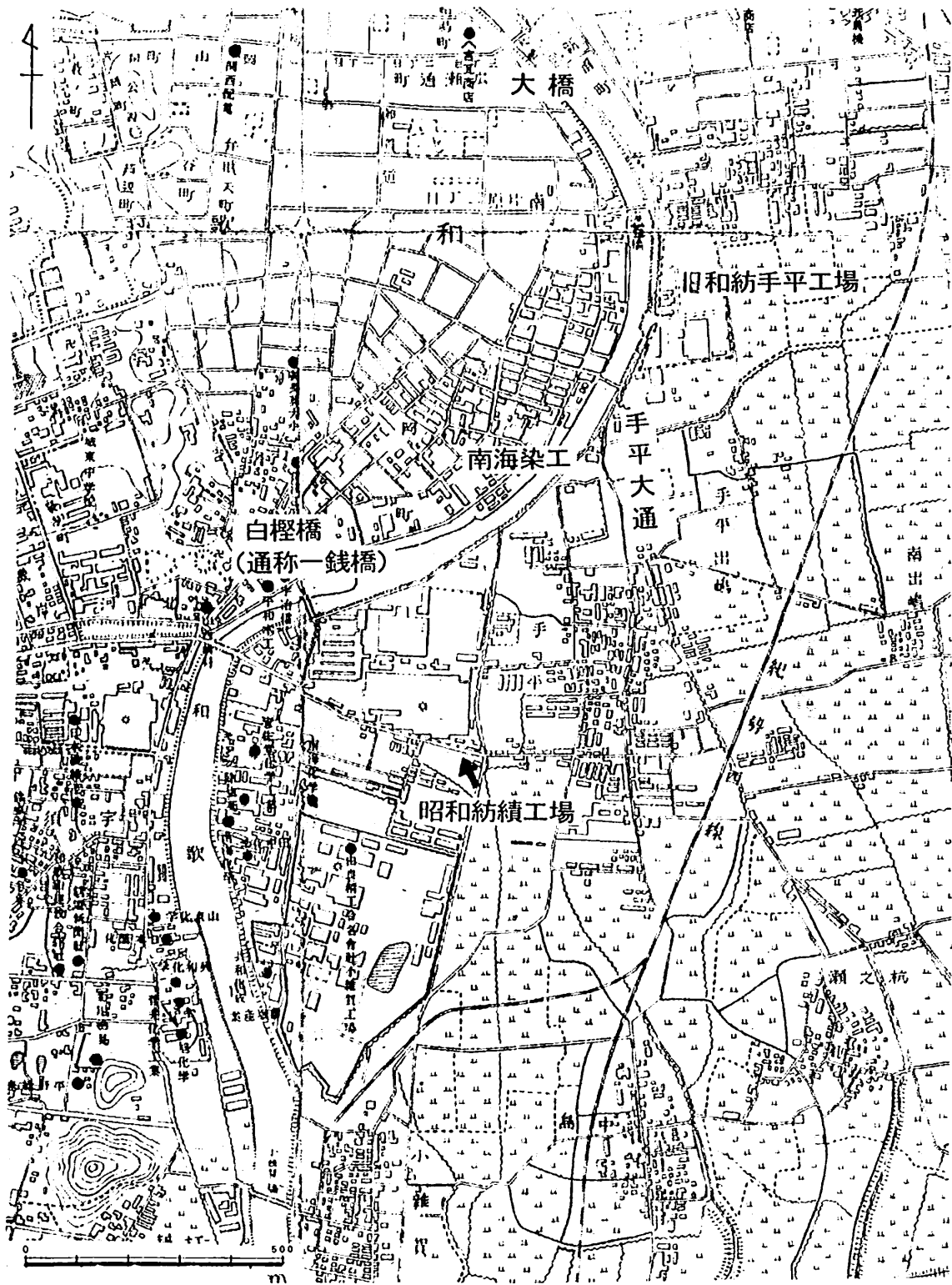


図4 昭和24(1949)年当時の手平地区及びその周辺(和歌山市航空写真測量図)

(2) 手平地区における沖縄県出身者

大正中期からの和歌川沿いへの工場立地とともに、図3に見られるように、昭和初期には手平地区の市街地化が既に進展していた。その後、市街地化はさらに進展し、図4に示した昭和24(1949)年の地図からは、旧昭和紡績工場の東側と南側に、十数棟の民間長屋が社宅とともに存在することが確認できる。昭和紡績工場を初めとする紡績関連に勤務する沖縄県出身の女工や男工は、後述するように所帯を持って寮を出ると、その多くが手平地区周辺に居を構えたと言う。こうした沖縄県出身者の定住化が、昭和初期に確認できた手平地区における市街地化の一つの推進要因となっていた。

聞き取り調査に協力していただいた女工達の記憶によると、昭和10年代の手平地区界限は、水田とため池ばかりの寂しい所で、紡績女工の間では、「寂しさや手平、厳しさや三合、哀れ紀ノ川、花の本社」と唄われたと言う。しかし、手平地区周辺に沖縄県出身者が最も集住していたのは戦前のこの時期で、沖縄県出身者を中心とする昭和紡績工場労働者の居住する長屋が、現在の手平5丁目から手平3丁目にかけて多数あった。手平5丁目には当時の20軒長屋が現存しており、まだそこに居住している沖縄県出身者もいるが、多くの人々は戦後に京阪神方面や沖縄へと移転していった。また、昭和46(1971)年の国体道路の建設で北東方向より広幅員道路が手平地区を貫いたため、多くの長屋が立ち退きにかかり、これをきっかけに他所へ転出する例も多かった。現在手平地区に南接する中島地区や小雑賀地区に居住する沖縄県出身者の中には、この時の立ち退きを契機に移転した事例も多い。

III 手平地区の紡績工場と沖縄県出身の女工

大正10(1921)年の『工場通覧』によると、和紡手平工場の工員数は、女工1411人・男工358人であり、当時の和歌山県下で最大の工員数を誇る紡績工場であった⁵。残念ながら、この内で沖縄県出身者が何人いたのかは不明である。統計年次

は少々ずれるが、昭和2年9月末現在で、和紡手平工場で就業する沖縄県の出身者は、女工150人・男工45人の合計195人であった(表2参照)。和紡の中では、手平工場よりも本社工場の方に沖縄県出身者が多かった。これらの統計から推測するに、大正末期から昭和初期にかけて、和歌山市内の紡績工場従業員の約1割が沖縄県出身者であったと思われる。

表2 昭和2年における沖縄県出身工員数

工場名	男工数	女工数	合計
和歌山紡績(株)本社工場	41	268	309
和歌山紡績(株)手平工場	45	150	195
和歌山紡績(株)中之島工場	45	118	163
和歌山紡績(株)紀ノ川工場	32	105	137

資料：注1の『沖縄女工衰史』、181頁より。

聞き取り調査を行った沖縄一世の女工達の話によると、彼女等が働いていた昭和10年代の昭和紡績工場では、もっと沖縄県出身者の比率が高かったであろうとのことだった。当時の昭和紡績工場で働く沖縄県出身者の中では、伊江島(国頭郡伊江村)と今婦仁村出身の女工が多く、本部・八重山・宮古島出身者も少なからずいた。沖縄県人以外で多かったのは、新潟県・岩手県・青森県・鹿児島県からの女工で、朝鮮半島出身の女工もかなりいた。筆者は今回の調査で、昭和紡績工場の女工達が写っている昭和10年代の貴重な写真資料を見る機会を得た。昭和14(1939)年に撮られたある作業班の集合写真には、舎監等2人とともに総勢31名の女工達が写っていたが、そのうち沖縄県出身者が13名(伊江島出身者は10名)で、新潟県と東北地方出身者が12名、鹿児島出身者が5名、朝鮮半島出身者が1名であった。

昭和10年代の昭和紡績工場の女工募集方法は、他と同じく「募集人」と呼ばれる女工の紹介者を介して行われ、沖縄各地にも多数の募集人がいた。聞き取り調査に協力いただいた女工の内の二人は、ともに伊江島出身で、後に沖縄県人会会長を務めた同郷のT氏の紹介で昭和紡績工場に就職した。当時の伊江島は貧しい農家が多く、島内で現金取

人の得られる仕事は皆無に等しかった。彼女等が伊江島を出た昭和10年代、同島には内地で女工をして、お金を貯めて帰郷していた者が既に存在した。そうした帰郷者は洗練されてあか抜けて見え、実家に仕送りして家計を助けたと、島内での評判も良く、当時の伊江島の若い女性達に、紡績女工になることに対するマイナスイメージはあまり無かった。昭和10年代には糸満市にも紡績工場があり、女工を募集していたが、その月給は2円50銭程度で待遇も悪かった。一方、内地の紡績工場の月給は養成工でも7円はもらえた。特にT氏が募集人をしてきた昭和紡績工場は、内地の紡績工場のなかでも待遇が良いとの評判で、T氏が来島すると、島の女性の方から押しかけ、女工になることを志願したと言う。また、当時、昭和紡績工場における女工生活を記録した宣伝映画が伊江島で上映されたこともあった。

こうして紡績工場で働くことが決定した沖縄の女工達は、募集人から約7円～20円程度の支度金・旅費を前借りして、募集人の付き添いのもと那覇から船で大阪天保山に着き、汽車に乗り換えて和歌山の紡績工場の女工寮へと向かった。募集人からの前借りは、実家に仕送りしていても、だいたいは紡績工場で働きだして3ヶ月から半年程度で返済できた。

IV 昭和紡績工場における女工の生活

図5は昭和10年代の昭和紡績工場の全景である。既述したように、同工場は現在三菱電機株和歌山製作所（以下、三菱製作所と略す）になっているが、その敷地は全く変わっていない。ここでは、図5と聞き取り調査をもとに、当時の工場内の様子と女工の生活にふれたい。

昭和10年代中頃の昭和紡績工場には、三つの出

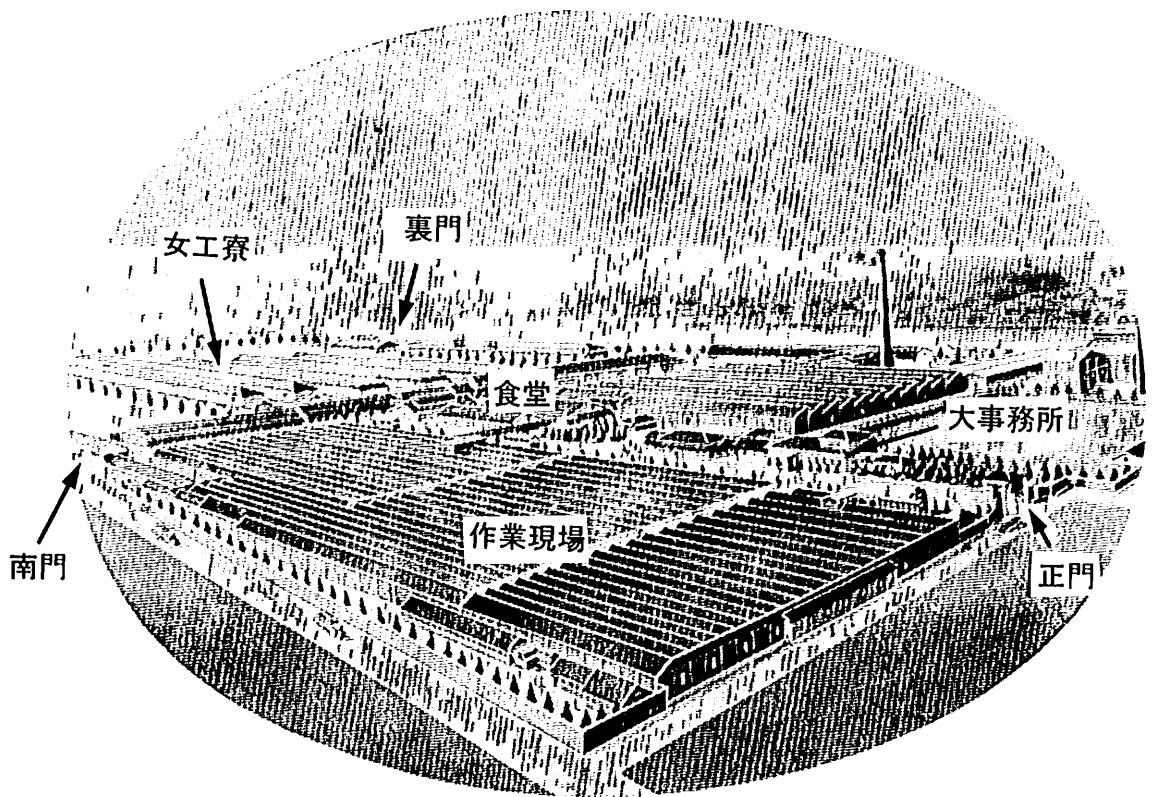


図5 昭和10年代の昭和紡績工場の全景
資料：昭和紡績株式会社発行『糸すがた』、1939年。

入り口があった。一つは、図5の右手に見える正門で、手平5丁目に面するこの門は、現在、三菱製作所の東門として使用されている。この旧正門からは、今でも煉瓦づくりの塀や建物が見え、その風景には紡績工場当時の趣きがかがえる。紡績工場当時、この正門を入れてすぐ右手に、間口一間程度の小さな建物があり、ここに門衛が常駐していた。門衛は正門の出入りを監視し、特に寮住まいの女工が外出する際には、ここで外出・通行許可証である門鑑のやりとりを行った。派手な格好で外出を試みる女工は、この門鑑をもらえないこともあり、正門を通らずに塀を乗り越える者もいたらしい。女工達の作業現場は、正門を入った通路の左手の大きな建物であった。正門を入れて右手の建物は、ホワイトカラーの働く「大事務所」であった。この正門から延びる通路の突き当たりの建物は、8人掛けのテーブルがずらりと並ぶ寮住み女工用の食堂で、これとは別に「通勤食堂」と呼ばれるホワイトカラー用の食堂もあった。二つ目の出入り口は、図5の左手に見える南門で、県道に面するこの門は、現在三菱製作所の正門として使用されている。図5に県道を走行するトラックが描かれているが、こうした製品の陸上輸送は、作業現場の最終工程に近いこの南門から行われた。三つ目の門は図5で確認できないが、和歌川沿いの通称一銭橋（現・白樫橋）周辺にあり、裏門と呼ばれていた。この裏門は現存しないが、かつて和歌川を船で輸送されてきた原綿の荷揚げに利用された。裏門の近くには原綿倉庫があり、荷揚げされた原綿は男工によってトロッコでそこに運搬された。この和歌川沿いの塀は、現在も紡績工場時代の煉瓦づくりのものが残っている。

女工達の寮は、図5の左手奥に東西に並ぶ二階建ての建物で、南から知恩寮・報徳寮・歓喜寮・昭和寮・和合寮と呼ばれていた。各女工寮には20畳くらいの部屋が1号から19号まであり、各部屋当たり20人くらいで使用していた。単純に計算して、これらの寮で常時2,000名弱程度の女工達を収容することが可能であった。畳敷きの部屋の中

には床の間と、各個人用の上下に仕切られた押入があって、その下を布団入れに、上を化粧品等の小物入れに使用していた。古株の熟練女工の押入には、たくさんの着物や小物がつまっており、入寮したての養成工は羨望の目でぞき見たと言う。部屋は仕事前に女工等が掃除するため清潔で、窓が大きくとられていたので明るかった。女工の部屋割りに関してであるが、出身地が異なるとお互いに言葉が通じないため、同郷の者が同じ部屋に自然と集まる傾向はあった。しかし、それは会社側に強制されたものではなく、部屋替えも簡単な許可を得るだけで可能であった。

各部屋には「寮長」が一人いたが、これは古株で人望のある女工が担当した。女工の管理・監視を行ったのは、この寮長ではなく、「舎監」と呼ばれた職制の女性達であった。女工とは別口で雇用される舎監は、地元和歌山の比較的裕福で教育のある子女のことが多く、女工の外出時に必要な門鑑も、彼女等の許可無しには得られなかった。女工の中にはこの舎監に厳しく叱られる子も多く、女工達は舎監を「先生」と呼び恐れていた。

さて、これらの女工寮の近くには、百畳敷きの講堂があった。講堂では一年に数回程度の割合で娯楽行事が催され、女工達が隠し芸を披露したり、芝居や演芸会を見て楽しんだ。日中戦争が激化していた昭和10年代半ば頃には、この講堂で月一回「報徳会」が開かれた。女工寮内には女工達の福利厚生施設として談話室・読書室が付設されており、希望者は料理・裁縫・作法等の講習会を受けたり、工場敷地内にあった「青年学校」で勉強もできた。景気の良かった頃は、全て会社持ちの慰安旅行が年に二回（春・秋）もあったが、参加しない女工も少なくなかった。女工達の日常的な楽しみは毎日入る風呂で、女子寮には銭湯なみの大浴室があり、日々の疲れを癒した。休日の楽しみは外出で、手平大通りにあった「新天地」という映画館に出かけたり、手平の少し北にある大橋の商店街に買い物に出かけた。この映画館の隣には写真館があり、女工同士で写真の交換をしあった

りもした。ただし、外出の際は舎監の許可が必要で、門限は午後9時であった。

次に女工達の職制であるが、これは、①甲番、②乙番、③昼専の三つに分かれていた。甲番と乙番は一週間交代で、早番（午前6時～午後4時頃）・遅番（午後4時半～午後11頃）を務めていた。一方、夜勤をしない昼専は午前8時からの勤務のみで、主として和歌山で所帯を持った通い女工のための職制であった。甲番・乙番にいた沖繩県出身女工も、所帯をもって寮を出ると、退職するか昼専にかわって働き続けた。こうした昼専女工達の多くは、通勤に便利な工場周辺に居を構え、手平地区周辺に沖繩県出身者の集住地区が形成されてゆく一因となった。

次に賃金と郷里への仕送りの話であるが、聞き取り調査によると、昭和10年代頃の賃金は寮費・食費を除いて、養成工で月給7円程度であった。給与制度は純粹な能力給であり、出身地に起因する賃金格差は無かった。紡織機一台を任せられると一人前と認められ、月給にして50銭ほど上昇した。最も熟練した一等工の月給は12円ほどになり、残業に精を出して一年間に100円以上の貯金をする女工もいた。こうした女工は「百円女工」と呼ばれ、寮内でも一目置かれ評判になった。沖繩の郷里への仕送りは、人によってその額は異なるであろうが、だいたい月にして5円程度であった。ただし、女工達の預金通帳は全て事務所が管理していたので、郷里へ送金する際は事務所に申請して行った。工場側による通帳管理の目的は、女工達の逃亡を防止する意味合いが強かった。

V 手平地区と和歌山沖繩県人会

和歌山沖繩県人会の前身に当たるものは、少なくとも昭和初期には存在しており、『南西諸島連盟』と呼称されていた。この団体の設立年次や活動内容等は定かでないが、その名称から推察されるように、例えば那覇会・本部会・伊江村会等、沖繩各地の出身地で規定される種々の下部団体を統括する組織であった。終戦後から沖繩が本土に

復帰するまでの間、現在の和歌山沖繩県人会は『和歌山沖繩協会』という名称で活動し、本土復帰を契機に現名に改められた。

戦後の同県人会で活躍したのは、二代目会長を務めた伊江島出身のT氏であった。手平地区にある土地流唐手道場の師範であった彼は、男気があり交渉するのが上手く、かつて昭和紡績の募集人をしてきたこともあり、沖繩県人からの人望は厚く、地域社会においても一目おかれる人物であった。しかし残念なことに、T氏が昭和55年頃に亡くなって以降、組織としての沖繩県人会は存続しているが、その活動は次第に行われなくなっている。特に平成に入ってから、冠婚葬祭の互助を行う程度で実質的活動は休止状態にある。

県人会活動が盛んであった昭和20年代から昭和50年代にかけては、毎年一度、沖繩県出身者の親睦を図るため、大阪市から沖繩舞踊団を招いたり、旅館に合宿したりしていた。県人会の会合も定期的に開かれ、手平5丁目にあった「沖繩会館」⁶が会場に使用されていた。沖繩会館は県人会会員の会費・寄付によって建設されたが、借地であったため昭和50年頃に立ち退かされ、現在その跡地は駐車場になっている。県人会組織が沖繩県出身者コミュニティで大きな意味を持ったのは、本土復帰以前であったと言えよう。終戦後から本土復帰までの沖繩は法的に外国として扱われたため、いわゆる「第三国人」視されることも少なくなかった。こうしたいわれのない差別に、組織的に団結して対処する意味でも、県人会組織は大きな役割を果たしてきた。本土復帰以前には、沖繩の親族に急な不幸があり、取り急ぎパスポートを取得する必要のある時や、就職の際に身元保証人が必要な時にも、県人会組織が活躍してきた。

昭和63（1988）年当時の和歌山沖繩県人会会員は県全体で92世帯おり、このうち、手平地区在住が36世帯、手平地区に隣接する中島地区・小雑賀地区在住が16世帯になっている。県人会の歴代世話役も、ほとんどが手平地区周辺に在住する者が担当してきた。現在の県人会会員のなかで、終戦

後に新規入会した人はほとんどおらず、古くから活躍してきた一世・二世が中心となって組織を運営してきた。しかし、近年では一世のほとんどが亡くなり、活動の中心は二世が担っている。当然のことながら、県人会に所属しない三世・四世の沖縄県人は多い。住宅地図と聞き取り調査で確認された限りでも、少なくとも、手平地区には五十数世帯、中島地区・小雑賀地区には二十数世帯の沖縄県出身者が居住している。

VI おわりにかえて

本稿では、昭和紡績工場とそこで働いた沖縄県出身女工に注目して、手平地区周辺における紡織業と沖縄県出身者の定住との関係を考察してきた。一連の考察で得られた知見を簡単にまとめるなら、(1) 手平地区周辺の市街地化は、労働力集約型の紡織関連工場の立地とともに進展し、(2) これらの工場で働いていた沖縄県出身者が、手平地区周辺に定住して沖縄県出身者のコミュニティを次第に形成し、(3) 和歌山沖縄県人会も手平地区とともに歩んできた、となろう。

手平地区周辺における沖縄県出身者コミュニティの形成史は、紡績工場での厳しい労働に耐え抜いた沖縄一世の女工達の歴史でもあった。言うまで

もなく、紡績工場の労働は過酷であり、聞き取り調査を行ったなかでも、多くの苦労話が聞かれた。一日の労働が終わると綿ボコリで全身が真っ白になり、沖縄出身の女工が混綿機に右手を巻き込まれる悲惨な事故もあった。女工の生活で若干ふれたように、門鑑・舎監・預金通帳管理等は女工達を厳しく管理するためのもので、高い扉で囲まれた工場は、『沖縄女工哀史』が描くような「監獄」をイメージさせる。和歌山の紡績工場は他地域と比較して待遇が良好であったと言われるものの、過酷な労働や望郷の念に耐えきれず逃亡する者や、劣悪な労働環境のなか身体を壊して帰郷する者もいたであろう。しかしながら、ある女工はこうした事情を踏まえた上で、「夫がなくなってから女手一つで、8人の子供を立派に育て上げられたのも、紡績のおかげじゃ。」と語った。この言葉からは、沖縄一世の計り知れないたくましさを感じられる。この彼女達のたくましさはその体験談とともに、沖縄二世・三世・四世へと継承されてゆくことを、筆者は願って止まない。

なお、和歌山市中之島地区も沖縄県出身者の集住地区の一つとして知られているが、時間等の制約により、今回は全く調査できなかったことを容赦願いたい。

〔謝辞〕 本稿の聞き取り調査にあたっては、過去昭和紡績に勤務された手平地区在住の玉城まつ姦氏・崎浜さよ氏・知念ヨシ子氏に御協力していただいた。また、和歌山沖縄県人会会長代理の知念義貞氏と事務局長の東江正夫氏にも、御忙しい中、貴重な時間をさいていただいた。聞き取り調査では、大阪市立大学学部学生である山本紋氏・西本拓史氏・辻本雄紀氏の助力を得た。皆々様の御健康を祈りつつ、ここに記して、感謝致します。

注

- 1 福地曠昭『沖縄女工哀史』、那覇出版社、1985、190頁。
- 2 創業当初の名称は和歌山紡績株式会社であった。
- 3 『和歌山県繊維産業史』、1977、181頁。
- 4 島津俊之「大正末年の「和歌山市街地図」について―景観年代・作成経緯・社会的背景―」、和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要17、1997、1～18頁。
- 5 後藤靖編『工場通覧Ⅷ（大正10年刊）』、1986（復刻版）、56～57頁。
- 6 1970年の住宅地図では、「沖縄協会本部」となっている。